鳥兜

能村　研三

遠くより分かる榛の木処暑の風

目耳なほ見ゆる聞こゆる今日白露

鳥兜とつさの一語つまりけり

吾亦紅足して花束淋しうす

稲の穂のはづみごころを持たせをり

鮎錆びて瀬音緊りぬ一つ星

蛇穴に入る山脈の紺深し

闇を切るごとし白桃に刃を渡し

望遠鏡秋思の人を捕へたる

地にひとり脚立にひとり松手入

あだ名は「ゲタ」さん

「沖」の初代編集長を務め最高顧問であった林翔先生の命日は十一月九日である。十四年前に亡くなったので「沖」誌友の中にはよく知らない方もおられるだろう。

翔と登四郎との交流は、昭和六年國學院大学で同窓として机を並べ、共に短歌誌「裝塡」で短歌を学んだのに始まる。登四郎二十一歳、翔十八歳であった、登四郎が大学に入って胸を患い休学していたため、三年のブランクがあったようだ。

交友七十年遂に君逝く青葉雨　翔

登四郎が亡くなる平成十三年まで、実に七十年に及ぶ親交があった。短歌誌への参加に始まって、その後俳句を志し「馬酔木」へ投句、そして昭和十三年に市川学園への赴任など常に一緒の道を歩んできた。

「沖」が創刊された時、登四郎の師である水原秋櫻子先生が、一誌を持つことを登四郎に許した際、「編集は林翔さんにお願いするといいよ」という提言を下さった。現在の「沖」の編集の基本スタイルは翔先生が築きあげたもので、五十余年踏襲されている。この編集レイアウトはその後いくつかの結社誌も真似て作られたようだ。初期の編集には私もお手伝いに参加し、翔先生宅に夜遅くまでお邪魔したことがある。

中の誰が起す風雲初句会　翔

編集のメンバーで新年に翔先生宅にお邪魔した時の句で、「中」という一字詠み込みの席題で翔先生が作られた句である。

晩年は「馬酔木」顧問としても、若手の育成に尽力されたが、「沖」では、月に三つの例会と同人句会で、登四郎と共に我々会員の指導をして下さった。

私は中学高校と市川学園に進学したが、登四郎が教頭であったため理科系コースに進む高校三年を除いて五年間は現代国語、古典、漢文などの国語系の事業は全て翔先生が担当された。初めて俳句を作ったのも翔先生の授業で、

青みかん八百屋の前を聖火ゆく

という句を作って市の中学生俳句大会で一位をとった思い出もある。

翔先生はお顔がやや四角なので、生徒からは「ゲタさん」のあだ名で親しまれた。

登四郎と翔先生の篤い七十年の親交が「沖」の礎を築いてくれたのは間違いない。

能村　研三